

特別支援学校の地域支援とサテライト（教育相談）の取り組み

特別支援学校の地域支援の紹介

- ① 来校による相談（あいルーム）とサテライトでの教育相談
アセスメント、保護者や教員等へのアドバイス、サポートプランの提供
- ② 学校園への訪問支援
保育や授業での子どもの観察、教員や校内委員会でのアドバイス
- ③ 地域の教員や保護者対象の研修会
本校での企画・実施、教育委員会・学校等主催の研修会での講師
- ④ 関係機関との連携
市障害者自立支援協議会への参加
保健センター、療育機関、教育委員会等との担当者間連携
- ⑤ 研究機関・大学への連携・協力
研究機関への研究協力、学生への研究支援・講義
- ⑥ 地域への理解啓発
学校通信の発行、オープンスクールの実施

実践の成果と課題

- 特別支援学校教育相談「サテライト」 平成28年9月開設
場所：市総合福祉会館（月2回実施）
- 利用率は飛躍的に伸びており、特に就学前の利用者が増えている。ニーズがあること、より早期の子どもを支援する機関として機能しつつある。一方で、未就園の利用者は依然少ないため、市巡回相談を通して発達上気になる子どもを広くピックアップし、関係機関と協力して子どもの成長をより丁寧に見守っていく必要がある。
- 相談支援の方針
- ・地域の相談者が気持ちよく利用できる場にする
 - ・子どもの状態をできるかぎり詳しく知る
 - ・保護者、教師等と一緒に考える
 - ・地域の子ども、保護者、教師等の役立つ支援を提供する
 - ・継続的な支援をしていく



自分が学んだと思うこと

- ・教育相談（サテライトでの相談）
地域の学校園での相談の依頼、サテライト利用者が「教育相談の内容を学校園所の先生に情報提供してほしい」といった相談の依頼が今年度に入って少しずつ見られる。この背景として、相談の拠点を市に設けたことで、地域の学校園所の先生方にとって教育相談を身近に感じるようになったこと、教育相談担当者が学校園所に出向きやすくなったことが考えられる。このことから教育相談室の場所は重要である。ただ、教育相談担当者の他の業務とのバランス、市社会福祉課への負担などを考えると、今後も月2回の実施が妥当ではないかと考える。

実践活動の今後に向けて

- ・教育相談（サテライトでの相談）
未就園の子どもの利用件数が全体の割合から見ても少ない要因としては、子どもの発達上の課題に対して気づきが少ない、気づいてもどこへ相談に行けばよいのか分からない、すでに違う機関へ相談に行っているということが考えられる。実際に市は、乳幼児健康診査で発達上気になる子どもに対して「子どもの心と言葉の相談」という臨床心理士による相談事業を行っている。ただし、これは継続的なものではない。一方で、市親子教室「かんがるう」、市療育事業「あすなる園」、市福祉協議会「まちの子育て広場」など、診査後の継続的なフォローができる場もある。それぞれにメリットがあり、これらの機関と連携を強化していくとともに、サテライトだからできる教育相談を展開していくことが大切だと考える。

地域支援づくりへの提案（夢を描く）

- ・教育相談（サテライトでの相談）
サテライトでは、保護者の話を聞いて保護者の子育てに対する考え方や気持ちに寄り添い、子どもへの支援の在り方を一緒に考えるだけではない。発達検査や行動観察といったアセスメントを通して、関係機関の取組をフォローしたり、必要な関係機関へつないだりする役割も担っている。中でも、市巡回相談では、発達上、気になる子どもに対してより早期に療育事業へつないだり、保護者への気づきを促したりする機関として、重要な位置づけにあると考える。けれども、巡回相談で発達上気になる子どもとしてピックアップされていても、保護者の理解が得られないという理由で、フォローが途絶えてしまうケースもあり、関係機関が保護者へ積極的にアプローチしていくことは難しい。子どもの行動上・学習上の問題が表面化して、ようやく保護者の子どもに対する理解が進むこともある。今後、より早期に必要な支援をするためにも、巡回相談の意義を担当者だけでなく保護者に対しても正しく理解してもらうことが大切であると考える。そして、発達上気になる子どもを広くピックアップし、一人一人の成長を丁寧に見守っていくという機運を高める取組を関係機関と共に推進していきたい。